

2020/07/10

平成【かまぼこメンチカツ】

姑：トメ

夫：タカシ

嫁：マキ

#### 1コマ目

月に1度は義実家で夕食という事になっているが、当初から私に対して小さな嫌がらせを繰り返すトメ。

トメ「はい、これマキさんの分ね」

マキ「ありがとうございます……ん？」

#### 2コマ目

ウトメや夫タカシのお茶碗には美味しそうなホカホカご飯。だけど私の茶碗をよく見ると、べっとりと焦げた部分を隠すように下にしてある固いおコゲご飯。

#### 3コマ目

マキ「なんか今日お義母（かあ）さんがよそってくれたご飯、私のだけ固かったんだけど」

タカシ「はあ？気のせいだろ、そんなの」

マキ「…」

#### 4コマ目

またある日の義実家飯の日。

トメ「はい、マキさん」

マキ「ありがとうございます…ます…」

名指しで手渡された煮物、よく見なくてもわかった。私のだけ、メイン具材であるお肉が入っていない。

#### 5コマ目

マキ「今日の煮物さあ…」

タカシ「偶然だろw被害妄想乙www」

マキ「…」

#### 6コマ目

トメ「今日はエビフライよー」

マキ「...」

大きなエビフライ10本、うち4本の『殻を取りそこねた』らしいがその4本全てが私の皿に。

#### 7コマ目

トメ「今日はヒレカツ☆」

マキ「...」

何故か私のだけ偶然、豚の脂身フライ。

#### 8コマ目

トメ「今日はちょっと気分を変えて、1人1皿にちゃんと分けてみたの☆」

そう言って出てきたアジの刺身、私のだけ骨抜きされてない。

トメ「茶碗蒸しもあるのよ〜！でも卵割るの失敗しちゃって、もしかしたら殻が入ってるかも...？」

4分の1サイズの巨大な卵の殻が入ったヤツ、もちろん私の分だった。

#### 9コマ目

マキ「あのさ、言いたくないんだけどお義母さんが私に出してくれる料理ってさ」

タカシ「またその話？いい加減にしろよ！俺の親がそんなくだらない事をする人間だと思ってるのか！？」

マキ「...」

#### 10コマ目

そして今日もまた義実家飯の日。

いつものダイニングテーブルに珍しく配膳まできっちり終えていたトメ

「今日はお手製のメンチカツよ〜！でもお肉が足りなくなっちゃったから、誰か1人はかまぼこフライなの〜」

マキ「ぶっ」

#### 11コマ目

いかにも『さ～誰がアタリを食べるかな～？』みたいにウキウキしてるトメを見て、思わず吹き出してしまった。

タカシ「マキ？」

マキ「あっははははは！てかきっとそれ、間違いなく100%私のですよね？違ったら今度ウトさんが買い換える車の代金、私が払います。もしタカシくんがかまぼこフライだったら実家の駐車場の名義、トメさんに書き換えてあげますよ。じゃあいただきますーす！」

#### 12コマ目

パクリと一口。案の定、かまぼこフライwww

マキ「あー、やっぱり...ご苦労様ですね、かまぼこをメンチと同じ大きさにしたんですか？お疲れ様です☆」

トメ「ぐ、偶然よ！誰に当たるかわからないって最初に言ったでしょ！」

#### 13コマ目

マキ「偶然が多いですねーしょっちゅうですねー強運の持ち主ですねー...宝くじでも買えばいいんじゃないですか？

ご飯の固いとこだけよそってくれたり肉抜き煮物てんこ盛りにしてくれたりアジの骨だらけのお刺身くれたり、豚脂身カツとか殻付きエビフライとか卵の巨大な殻入り茶碗蒸しとか、それ全部私とかwものすごい確率の偶然、すっっぱらしいですね！」

笑いも口も止まらない私。トメは見る見る青ざめて震え出し、それを見た夫とウトは愕然とした表情でメンチカツとかまぼこフライ、そしてトメを交互に見る。

#### 14コマ目

マキ「私が気づいてないとでも思ってたんですか？たまにしか来ないし、義両親との食事も嫁の義務だと思ってたし、意地汚いと思われるのも嫌だから黙ってましたけどね。まあ心の中で『子供みたいな嫌がらせだなあ』っていつも思ってたんですよ」

見ると半泣きだったトメは涙を流し始め、小さく首を振っている。だけど、憐れむ気にはならない。

#### 15コマ目

マキ「...気が小さいのか、かわいい息子ちゃんには見られたくないからか、表立って嫌がらせするわけじゃないし。でも、そのくせ『すごく良い姑』って顔してるのが滑稽で不愉快で気持ち悪かったですね」

#### 16コマ目

私「まあ実際、夫君にとっては良いお母さんなんでしょうけどね。良いお母さんも『姑』になると、こうなっちゃうんですね」  
バン、とテーブルに箸を叩きつける。

#### 17コマ目

マキ「でももう私、我慢するの疲れたんで帰ります。これまでは食べられる物だけだったけど、これから何を入れられるかわかりませんし。私の事がそんなに嫌いだったら、私の産んだ子もきっと大嫌いですよ？」

#### 18コマ目

真顔で言い放つと、トメとウトははっとした顔でこちらを見た。  
そう。実は今日義実家を訪れたのは、子供が出来た報告をするためだった。これまで内緒にしてたけど、安定期に入ったからと思って...なのに、このザマだ。

マキ「嫁嫌いのあまり、祖母が孫を...って事件もありますしね！」

#### 19コマ目

あーコワイコワイと呟きながら私は席を立ち、自分の荷物を手にとった。  
マキ「私は自分の子を守らなきゃいけないので、金輪際こちらには来ません。ではお元気で、永遠にさようなら！」

#### 20コマ目

ウトとタカシに怒鳴りつけられて泣き喚くトメの声を背後に、にっこり笑ってリビングを出る。  
車に乗ろうとした時、タカシが慌てて追いかけてきたが、言ったセリフは  
「何でもっと早く言わなかったんだよ！」

#### 21コマ目

それを聞いた私はカァァァ〜ッと頭に血が上り、夫の腕を振りほどいて車のドアを閉めた。  
タカシ「おい！聞いてるのか！？」

マキ「私、今まで何回も何回も言ったよね？それを『偶然』『被害妄想』『俺の親を侮辱するな』で終わらせたのはどこの誰？」

タカシ「そ、それは...」

ごによごによ言いながらもタカシは車の窓をつかんでいる。

#### 22コマ目

マキ「...轢くぞ？」

低い声で告げると、タカシは思い切り後ろに飛び退いた。本気だってわかったみたい。そのまま私は車を走らせて、同じ市内にある実家へ帰った。

#### 23コマ目

実家には里帰り出産の予定だったのを良い事に、大事な身の回りの物は既に送りつけてあったし、姑から幼稚な嫌がらせをされるたび愚痴って「もしかしたら早めに実家にお世話になるかも」と伝えていたから問題ない。

#### 24コマ目

翌日、平身低頭で実家にやってきた夫は、リビングの床に頭を擦り付け半泣きで私と私両親に反省と謝罪を述べたので、今回だけは許す事にした。

但し、私は金輪際義実家には行かない事、産まれる子供が分別のつく年齢になるまでは子供も連れて行かない、行かせない事。それを書面にし必ず守る事を約束してもらった。

#### 25コマ目

だけど...子が『分別のつく年齢』が何歳かは明言してないし。

初孫には会えると思うなよババァ！

そう私が心の中で固く思っている事は、夫には内緒だ。